

# フィードバックに関するアンケート調査

佐藤 誠子 (大学教育開発センター特命講師)

## 1. はじめに

本学では2011年のカリキュラム改正により従来の「英語コミュニケーションLR/SW演習」から「Communicative English III / IV」に科目名を変更し、前期のCommunicative English III（以下CE III）では主に英語でのスピーチ・プレゼンテーションを扱い、後期のCommunicative English IV（以下CE IV）では主にライティングを扱っている。

1年生を対象としたCommunicative English I / II（以下CE I、CE II）では英語4技能（リスニング・リーディング・スピーキング・ライティング）のうちリスニングとリーディングを重視するのに対し、2年生を対象としたCE III およびCE IVではスピーキング・ライティングを重視している。スピーキング・ライティング重視の授業ではより多くのアウトプット活動の機会を学生に与えることが期待されている。例えば、オーラルコミュニケーション、ディスカッション、スピーチ、プレゼンテーション、エッセイ、e-mailなどが活動の例として挙げられる。これらの活動では、教員が学習者のアウトプットに対しフィードバックを与えることが期待されている。本稿では、この「フィードバック」に着目する。

英語クラスにおけるフィードバックのあり方についての議論は続いており、いまだ結論は得られていない。Ellis (2009) が述べているように、フィードバックのあり方に対する答えは一つではない。クラスの規模や学習者の英語レベル、学習者の英語学習背景、授業の目的など様々な要因が複雑に絡んでいる。それぞれの状況下で、教員はフィードバックの方法を考えなくてはならない。フィードバックを与えないというのも選択肢の一つであろう。Truscott (1996) はフィードバックが学習者の英語能力の向上に役立っているという明らかな証拠を示す研究がないことから、授業でフィードバックを与えることを止めるべきだと論じた。さらに、彼はフィードバックが学習者にとって無駄なものであるだけでなく、フィードバックがあることで学習者が英文を生み出すことよりも、文法エラーに気をとられてしまい、ライティング能力を伸ばす過程において悪影響を及ぼしていると結論づけた。一方で、フィードバックを与えた学習者の方がより正確な英文を作成することができるようになったと結論づけ、学習者の英語能力の向上にフィードバックが有効であることを証明している研究 (Ashwell, 2000; Ferris & Roberts, 2001; Chandler, 2003) もある。

教員がフィードバックを与えないというのも選択肢の一つとして考えられると上述したが、果たしてフィードバックを受ける側、つまり学習者はフィードバックについてどのような意見を持っているのだろうか。本稿では、英語クラスを受講している学生を対象に、彼らがフィードバックを受けることをどのように感じているのかについて、アンケート調査の結果に基づいて考察を行う。

## 2. 調査の概要

### 2-1. 調査参加者

調査参加者は、本学で平成24年度から平成25年度にCEⅣ(クラスA)とCEⅢ(クラスB、クラスC)を受講した大学2年生44名である。本学では大学2年時に受講するCEⅢおよびCEⅣの授業は3つのレベルに分かれており、大学1年時の学生のTOEICスコアをもとにクラス決定がなされる。調査を実施した3クラスはレベル2にあたる中級レベルのクラスである。3クラスのTOEICのスコアは、165点から500点(M=375.0、SD=81.8)である。クラスAのTOEICスコアは410点から480点(M=451.8、SD=22.5)、クラスBのTOEICスコアは270点から500点(M=367.5、SD=65.5)、クラスCのTOEICスコアは165点から500点(M=323.6、SD=77.0)である。レベル別ではいずれのクラスも中級レベルに位置付けられているが、TOEICスコアの平均点から見ると、3つのクラスの中ではクラスAが最も平均点が高く、クラスCが最も平均点が低い。

### 2-2. 調査方法

各クラスで学生にアウトプット活動を与え、それに対し筆者がフィードバックを与え、そのフィードバックをもとに修正させたものを提出させた。その後で、アンケート用紙を配布し回収を行った。実施したアンケート調査の内容は以下の通りである。

1. Correction Key はどうですか。  
(とても役に立つ・役立つ・まあまあ・あまり役立たない・全然役立たないから一つ選択)
2. そう答えた理由を教えてください。
3. フィードバック(担当教員による添削)について教えてください。  
(必要・不要・どちらでもよいから一つ選択)
4. そう答えた理由を教えてください。

#### (1) クラスAでの活動

授業は週一回行われ、授業時間は一回90分である。期末試験を含め計16回の授業が行われる。この授業では、7回目に中間試験として200語から300語程度の3パラグラフエッセイの作成を、16回目に期末試験として300語以上350語未満の3パラグラフエッセイの作成を課した。いずれの試験においても、あらかじめテーマをいくつか挙げ、学生に好きなテーマを選択させて期限日までに提出させた。提出させた後、筆者がフィードバックを与え、書きなおさせたものを期限日までに提出させた。また、フィードバックを与えた際に、Correction Keyの一覧を学生に配布し、それぞれの記号の意味を解説した。さらに理解を深めるためにエラーを含む英文を資料として配布し、修正箇所はどこか、どのように修正すべきかをグループ内で考えさせる活動を行った。

#### (2) クラスB・クラスCでの活動

授業は週一回行われ、授業時間は一回90分である。期末試験を含め計16回の授業が行われる。この授業では、7回目に中間試験として150語から200語程度でまとめた英文を2分間でプレゼンター

ションすることを課した。14 および 15 回目には期末試験として 250 語～ 300 語程度でまとめた英文を 3 分間でプレゼンテーションすることを課した。いずれの試験においても、あらかじめテーマをいくつか挙げ、学生に好きなテーマを選択させて期限日までに原稿を提出させた。提出させた後、筆者がフィードバックを与え、学生が修正したものを最終原稿としてプレゼンテーション終了後提出させた。また、フィードバックを与えた際に、Correction Key の一覧を学生に配布し、それぞれの記号の意味を解説した。

### (3) フィードバックの方法

筆者がフィードバックの方法として選択したのは間接的フィードバックである。間接的フィードバックとは、文法エラーを指摘した上で適切な答えを示す直接的フィードバックとは異なり、学習者に文法エラーがある場所を示すが、答えは明示しないフィードバックのことである。間接的フィードバックには種類があり、例えば、文法エラーがあることを下線や丸などで示すだけのものや、文法エラーの場所を示しどのような文法エラーをしているのかヒントを与えるために記号を付したもの、どのような文法エラーをしたのかをまとめて文章にしたものがある。

筆者が用いたのは、文法エラーの箇所にとどのような文法エラーをしたのか学習者が気づくように記号を与えるという間接的フィードバックである。用いた文法エラー記号 (Correction Key) を表 1 に示す。間接的フィードバックを選択した理由は、記号を与えることで自らエラーに気がつくようになることを促したかったからである。Swain(1995) は、アウトプットの機能の一つとして気づき機能 (noticing function) を挙げている。学習者はアウトプットを行う際、まず、自分が伝えたい内容に必要な言語知識を自分が持っていないことに気づく。さらに、表現したい内容に必要な言語形式に気づく。そこで、自分が既に知っている言語形式と、まだ知らない新しい言語形式の違いに気づく。学習者はアウトプットの過程で多くの「気づき」を経験する。この「気づき」が学習者の第二言語習得過程において、インプットからアウトプットへと促進させる働きを持っているのである。

表 1 Correction Key

Symbol	Error Type/ Explanation
A	Articles
VT	Verb tense
VF	Verb form
Om	Omission
Sp	Spelling
WC	Word choice
WO	Word order
S-P	Singular-plural
Punc	Punctuation
Pre	Preposition
? ~ ~ ~ ~	I am not sure what you are trying to say. Unclear message
~ ~ ~ ~ ~	There is a better way of saying this.
XXX	Wrong answer

### 3. 結果・考察

本節ではアンケート調査の設問ごとに結果を示しながら、学生のフィードバックに対する考えを考察していく。

#### 3-1. Correction Key について

図1より、約8割の学生が Correction Key を役立つものとして評価していることがわかる。次にクラス別の結果を示す。

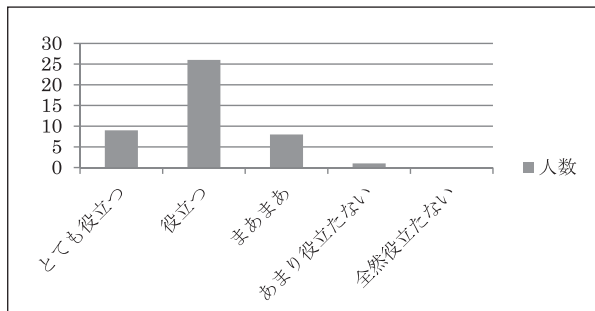


図1 全体の結果

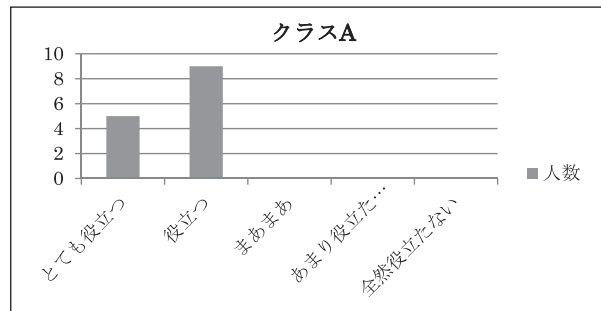


図2 クラスAの結果

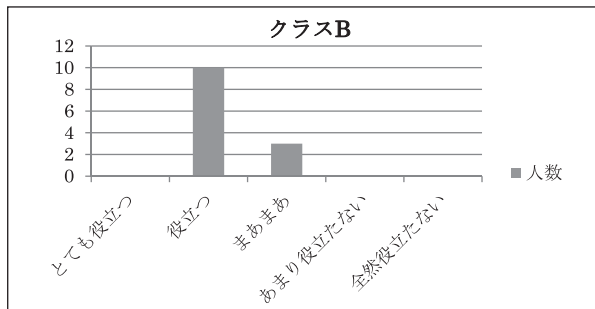


図3 クラスBの結果

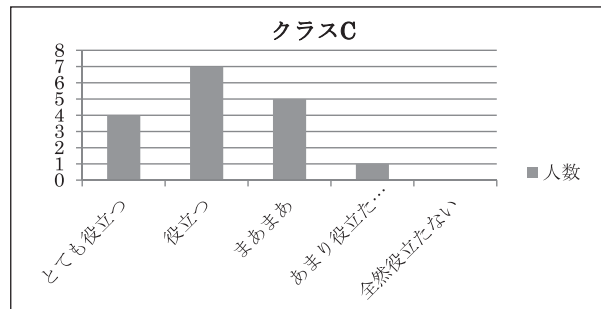


図4 クラスCの結果

3クラスの中ではTOEICテストの平均点が最も高いクラスA（図2）では全学生が役立つと評価しているのに対し、クラスB（図3）、クラスC（図4）の2クラスでは Correction Key を良くも悪くもなく「まあまあ」と評価する学生がいたことがわかる。3つのクラスの中で最も TOEIC の平均点が低かったクラスC（図4）では、Correction Key の評価にばらつきが見られることがわかる。

#### 3-2. Correction Key について—理由—

多くの学生がフィードバックの方法として用いた Correction Key を好意的に受け止め、役立つと評価していることがわかった。以下では、学生がアンケート調査で記述した Correction Key を評価した理由を示す。

まず、「役立つ」と回答した学生の理由は以下の通りである。

- ・間違えた理由がすぐわかる
- ・初めて見たが、わかりやすかった
- ・自分の文章が正しいかすぐチェックできる

- ・自分の苦手なところがはっきりわかった
- ・英文を書く時のヒントになった。自分の知らない単語（言い方、表現の仕方）を見て、新しく学ぶことができた
- ・自分の間違いの場所・理由がよくわかった
- ・自分の間違いやすいポイントについて分かった
- ・文章を書く上で何に注意すればいいのか分かった
- ・自分で一度立ち返って確認できた
- ・自分がどんなミスをしやすいかわかった
- ・チェックする時、要点を絞ってチェックできた
- ・英作文を直すために不可欠なものだった
- ・自分の文章のどこが間違えているのかわかりやすい
- ・間違いのヒントを得ることができる
- ・具体的に何がおかしいのかすぐにわかる
- ・わかりやすい
- ・自分の間違えたところがわかる
- ・自分のミスがわかって苦手がわかる
- ・何が違うのかわかりやすく、自分で考えて直せる
- ・自分ができていないところがわかる
- ・何がどう間違っているのかわかりやすい
- ・スピーキングからライティングまで幅広い英語を学べる
- ・間違いに気づける
- ・自分が苦手なところがわかる
- ・長々と書くよりコレクションキーの方が短くて元の文章が見やすい
- ・一目見て誤りがわかる
- ・ただ正解を教えられるよりも自分で考えることができる
- ・書いた文章が自分でも理解できないときや、何かおかしいけれど何がおかしいのか分からないときに役立つ
- ・どういう間違いをしたかがひと目でわかる
- ・わかりやすい
- ・自分が普段どういうところが弱いのか（例えば、前置詞が間違っているなど）が改めて実感できるので役立つと思う
- ・自分で違うところを調べるので覚えやすく同じ間違いをしにくいと思う

以上の結果より、Correction Key は学生が間違えた場所を示し、その理由を理解するのを助け、再度英文を書く際にそれぞれの注意すべき点、弱点を認識するのを助けていたことがわかる。

次に、「まあまあ」「あまり役立たない」と回答した学生の理由を示す。

- ・あまり気にしていなかった
- ・その単語（記号）だけじゃあまりわからない

- ・コレクションキーで間違いを示すことで直しがしやすい。でも、普段使わないのでコレクションキーの意味をわかっていればよいのだが、すぐにどういう間違いなのかわかりにくい。コレクションキーになじみがないからだと思う。
- ・パッと見た時、わかりにくい
- ・記号で間違っていることを示すことはスマートでいいが、いまいち意味がわからない記号が多いので最初は困った
- ・発想がしやすいから
- ・端的だが、覚えたり、なれないとじっくりこない
- ・わかりにくかった

以上の結果より、Correction Key をあまり好意的に受け止めなかった学生の多くは、Correction Key に対する馴染みにくさを指摘していることがわかる。Ferris(2011) はある程度文法的知識のある英語学習者には間接的フィードバックが、初級の学習者には直接的フィードバックが適していると述べている。筆者が用いた Correction Key はある程度の文法的知識を持っていることを前提としている。例えば、冠詞、時制、前置詞などの文法用語の理解や文法知識に乏しい学生にとっては、Correction Key を理解し、活用することは容易ではなかったことが考えられる。

### 3-3. フィードバック（担当教員による添削）について

9割以上の学生が担当教員による添削（フィードバック）を必要としていることがわかる。3-1、3-2では Correction Key を好意的にとらえなかった学生がいたにも関わらず、教員によるフィードバックを不要と回答した学生は一人もいなかった。

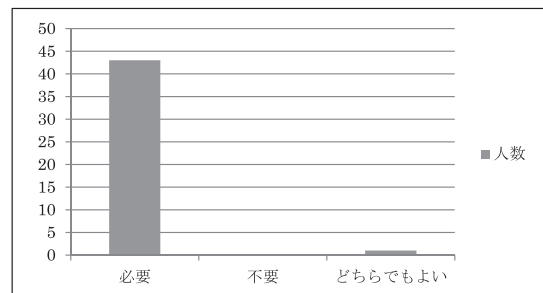


図5 全体の結果

### 3-4. フィードバック（担当教員による添削）について—理由—

フィードバックは「必要」と回答した学生の理由は以下の通りである。

- ・具体的にどこを改善すればいいのかわかる
- ・どこを直したらよいか分かりやすい
- ・よりよい文章が書けるようになる
- ・せっかく書いたのでよりよいものに近づきたい
- ・自分だけでは見つけられない誤りに気づくことができた
- ・先生が自分の文章を読んでいるのが伝わり次回へのやる気につながった
- ・成長がよく感じられる
- ・自分では気づかない間違いに気づくため
- ・自分のどこが間違っているのかを知ることができる
- ・自分が間違っているところが分からないままなのは嫌だ
- ・自分で気づかない所まで指摘し、的確な指導をしてくれる

- ・間違えた理由がわかり復習しやすい
- ・自分のミスに気づける
- ・私たちが交換添削（学生同士の添削）だけでは気がつかない部分も多い
- ・自分が間違えている箇所がわかり、違いを直せる間違いがそのままにならない
- ・参考にしたい
- ・自分だけではどこがおかしいかあまりわからない
- ・添削なしのやりっぱなしはよくないと思う
- ・勉強するときに役立つ
- ・フィードバックの清書の際に自分では気づけないミスがよくわかるから
- ・英語が苦手なので自分が間違えているかどうかもわからないので添削してもらえると安心できる
- ・英語に親しむことは出来ると思う
- ・間違えたままにならない
- ・フィードバックがないと文法的に間違っているところがいまいちわかりにくい
- ・自分ではどこが間違っているのかわからない
- ・より正しい英文を作ることができるようになる
- ・次のことに役立つから必要だ
- ・間違いを自分で気づいて直す方がよいと思う
- ・自分で正しい文法などを調べても間違っているかもしれないし、先生に添削された方がその後自信がつく
- ・自分の間違いに気づく
- ・間違っているところは教えてほしい
- ・コレクションキーがないと校正ができない
- ・自分では正しい英語になっているか判断できない
- ・自分では答えが見つけれないことが多い
- ・自分の書いた文章に自信がなくてどこが間違っているか知ることができる
- ・自分では気づかないミスに気づける
- ・フィードバックがないと安心して発表ができない、多分
- ・間違ったまま覚えるのは危険
- ・とても助かる
- ・客観的に出来具合がわかる
- ・添削をしてもらうことでより簡潔で分かりやすくて正確な文になる。読む方も多少自信がつく。
- ・特に、日本語をそのまま英語に置き換えただけでは英語としておかしいというところが分かる  
最後に、「どちらでもよい」と回答した受講生の理由を以下に示す。
- ・答えをもらえば自分でもできそう

以上の結果より、ほとんどの学生が教員によるフィードバックを好意的に受け取り、必要とされていることがわかる。フィードバックが文法エラー修正に役立っているだけでなく、英文を書く際のモチベーション向上に役立ち、自信へとつながっていることもわかる。

## 4. おわりに

本稿では、英語クラスを受講している学生を対象に行ったアンケート調査の結果にもとづき、学生がフィードバックを受けることをどのように感じているのかについて考察してきた。

英語クラスを受講するほとんどの学生が、彼らが行ったアウトプット活動に対して、教員からのフィードバックを望んでいることがわかった。アウトプット活動に重点を置く授業において、教員がフィードバックを与えないというのも選択肢の一つとして考えられると前述した。しかしながら、ほとんどの学生が教員からのフィードバックを望んでいるとわかっていながらフィードバックを与えないという選択をするのは、教員にとって容易なことではないだろう。

フィードバックの方法については、Correction Key がどの学生にも役立つものとして受け止められているわけではないことがわかった。Correction Key で扱っている文法的知識や文法用語の理解が十分ではない学生にとっては Correction Key によるフィードバックは有用ではないのかもしれない。Correction Key を用いる際に学生が十分に理解できるように説明や解説の時間をより多く設ける必要があるだろう。この点については、さらなる調査が必要と考える。今後の研究課題としたい。

多くの学生が教員のフィードバックを好意的に考え、必要としていることがわかった。しかし、複数のクラスを受け持つ教員にとってはフィードバックを与える際に時間的な問題が常についてまわる。教員に求められているのは、時間的な問題を考慮しながら、どのような形であれ、継続可能なフィードバックを学生に必ず与えることではないだろうか。

## 参考文献

- Ashwell, T. (2000). Patterns of teacher response to student writing in a multiple-draft composition classroom: Is content feedback followed by form feedback the best method? *Journal of Second Language Writing, 9*, 227-258.
- Chandler, J. (2003). The efficacy of various kinds of error feedback for improvement in the accuracy and fluency of L2 student writing. *Journal of Second Language Writing, 12*, 267-296.
- Ellis, D. (2009). A typology of written corrective feedback types. *ELT Journal, 63*(2), 97-107.
- Ferris, D. R. (2011). *Treatment of error: In second language student writing* (2<sup>nd</sup> ed.). Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Ferris, D. R., & Roberts, B. (2001). Error feedback in L2 writing classes: How explicit does it need to be? *Journal of Second Language Writing, 10*, 161-184.
- Swain, M. (1995). Three functions of output in second language learning. In G. Cook, & B. Seidlhofer (Eds.), *Principle and practice in applied linguistics* (pp.125-144). Oxford: Oxford University Press.
- Truscott, J. (1996). The case against grammar correction in L2 writing classes. *Language Learning, 46*, 327-369.